

「晴雨計・その後」⑮

「事実は小説より…」 1

平山征夫

久しぶりに「晴雨計、その後」

を書く。二十五年前に書いた「晴雨計」などの随筆も仙台の河北新報に掲載した四編の内の二編を残すのみとなった。それで何だか勿体なくて中々「その後」を書かずにいたのだが、もう一つは書こうと思った「その後」の内容が、天皇・皇后両陛下に関わるので、何だか勿体なくて逡巡していたのだ。

二つ残ったうちの「ある過疎地の子供達」は、新潟日報の「晴雨計」の4回目に「綾子舞の子供達」で書いたことを、仙台の

人たちにも知って貰いたくて書いたものなので、ここでは二十五年前書いた河北新報の随筆をコピー再掲するにとどめたい。

私にとっての最後の随筆（と思つて二十五年前の新聞切り抜きを見ると、更にもう一つあることが判明。離任して切り抜きを手にしていなかったため存在を忘れていたのだ）は「事実は小説より…」と言うものだ。実際の世の中で出会う事の方が小説よりはるかに面白いことがあるという事で、自ら体験した面白い話を書き連ね、最後に突然の知事選出馬になったことに触れ「これも小説より奇なり」と締めくくっている。実は「その後」を書くのを逡巡させたもう一つ

の理由が二十五年前の例示の③の存在だ。夜バイパスを走っていたらいきなり飛び込んできた「パチンコ」のネオンサインの話だ。「少々品のない話で失礼」と断つてはいるが・・・でも

この随筆に触れないと終われないので、覚悟を決めて書くことにする。ついでに言えばこのパチンコ店の名前は新潟では大手なのでよく知られているが、頭に「ダイ」がつく。それですぐ「大」の字を想定してしまつたが、それは、私自身に品がないからだろうか・・・。

「その後」を書くわけだから、あれからの二十五年間の体験の中から小説より面白い話を厳選して書いてみる。

①正に「その後」の話だが、こ

のパチンコ店のネオンサインの話飛び上って喜んで聴いていた高校時代の同級生M氏、大手新聞社の記者の彼からある日厚い封筒が届いた。開けてみると彼の務める新聞社の日曜版だった。添付されていたメモには「貴兄のネオンサインの話、写真の通り確認しました」とあり、新聞の一面にパの消えたネオンサインの写真が大きく載っていた。幸いチは消えていなかったが：。  
②ゴルフでは珍プレイなど枚挙に暇がない。前上がりの斜面で打つとかなりの確率で後ろに球が飛んでくるAさん。ティーショットを横のマークに当てて大きく後ろの林の中に球を入れて

しまったTさん。林から出てきた球が丁度最初のティーショットと同じ位置に戻ってきたので思わず「今度何打目？」と聞いたら、「えーと、7打目かな！」。

「この茶店で汁粉を食べたらゴルフまで甘くなり次のロングで十一叩いた」という私の話を聞いて「そんな馬鹿な！」と言ってわざわざ汁粉を食べたNさん。すると暗示にかかったようにあの堅いNさんが乱れ、ホールアウトして「スコアーは？」と聴くと不機嫌そうに「十一」。グリーン周りのバンカーを3つ渡り歩いたSさんに「もうひとつありますよ」と私。エール？のもりで「4つ目に入れれば、これが本当の第4バンカーですよ」

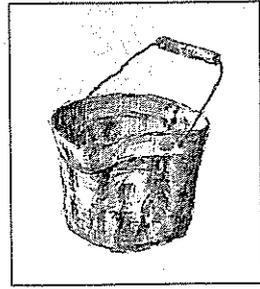
と言ったら見事に入れた。彼は新潟地元の第四銀行員(バンカー)だった。池の水ぎわに転がって落ちたボールを手で拾おうとして前かがみになったら、そのまま頭から池に落ちてしまったIさん。ゴルフを始めるというので、ゴルフショップに同行してクラブを選んで、「本番まで最低一〇〇球は打っておいてくださいね」と言っておいたKさん。一週間後の本番スタート時にキヤデイさんがバッグを開けたらビニールをかぶったまま……。最後は同じくゴルフを始めたばかりのA君の話。ドライバーが使いこなせずアイアンでティーショットをするのだが、ヘッドが立ちすぎて芝がはがれる。ス

タートホールで前の組がティーショットを打っている後ろでA君が素振り、正に打たんとバックスイングに入ったその人の首の後ろにA君の打ったターフがドサリ！  
ゴルフにまつわる話は尽きない。  
③ ついでに品のない話をもう一つ。知事として経済視察団を率いてインドネシアに行った時のジャカルタのホテルでの話だ。夕食の外出から帰って同行の間とホテルの庭で飲んでいると、向こうのプールサイドを妙齢の女性が逝ったり来たり、少し遠くて暗いけれど流し目を送っているように見える。それで冷やかしの積りで秘書と二人で彼女に近づいていったら、いきなり

歌い出した。「どんぐりコロコロ、どんぶりこ……」。一瞬あつけにとられていたが、歌の最後を聞いて深く納得した。「坊ちゃん一緒に遊びましょう」。帰国記者会見で「視察の成果は？」と聴かれて種々説明の後に「個人的なことから、駄洒落好きの私にとって素晴らしいネタを仕入れることが出来た」と言っこの話を紹介した。しかし、「知事の創作だろう」と殆ど信用されなかった。  
更に品がなくなるのだが、この話には追加のオチがある。翌朝レストランでメンバーに昨夜のどんぐりコロコロの話を得意そうに私がしていると、視察団参加最長老のWさんがおもむろ

に「実は私の部屋に昨夜妙な電話がありました・・・」と話し出した。「いきなり電話で女性がロング三万円、ショート一万円って言うんですが、何のことかなと答えに窮していると、ショート一万円と繰り返すんです。電話なのにどうして私のもがショートだとわかったんでしょうかね?」。これで私の話は一挙に精彩を失ってしまった。

(平成二十九年七月二十一日)



カット・工藤倫弘

私の故郷(新潟県柏崎市)から嬉しい便りが届いた。柏崎の山奥の小学校の先生をしているS君が、県の合唱祭で今年も審査員特別賞を受賞したことを知らせてきたのである。僅か全校児童七人の合唱で...

S君との再会はこの子供達が取り持つものだった。平成元年、故郷新潟の支店長として赴任した私は、ある朝地元紙に載った

### 随想

「初参加の鵜川小学校の一六一年生十三人の合唱が審査員特別賞を受賞」の記事に感動を覚え、依頼のあった県の教育関係の月報に、このことを生きた教育の事例として書いた。

そして、またこの子供達は、約五百年前上杉房能(越後守護職、謙信の父長尾為景に滅ぼされた)の奥方綾子が、村人に伝えたという「綾子舞」(歌舞伎の原形を伝える伝承芸能として

その後、S君の誘いでこの子供達の合唱を聴く機会を得た。想像していた通り、小さな一年生が上級生について一生懸命大きい口を開けて歌っていた。そのハーモニーは恐ろしいほど澄んでいた。

面を覆っていた。別れ際にS君は「この春は四人も卒業するのにな新しく入って来る子供はいません。七人で合唱を続けられるか...」と少し寂しそうに言っていたのだが...

### ある過疎地の子供達

平山征夫

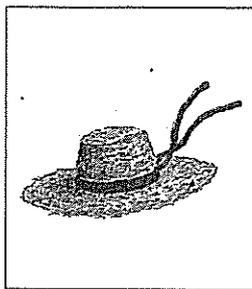
歌っている合唱祭の審査員の講評には「何と素敵だ、そして珍しい合唱団でしょう」「とても楽しい学校でしようね。いつまでも続けて下さい」との励ましの言葉があった。しかし、S君の子供達の合唱も綾子舞も、春の卒業式が訪れる毎に厳しい現実を迎えている。

先生から電話があった。奇遇にも高校時代の後輩S君だった。高校時代、合唱好きの男性四人が集まってはタークタクスの真似をしていたが、その中の一人のS君だったのだ。

それを讀んだ担任の国の重要無形民俗文化財に指定)を守ってくれている子供達でもある。雪深い山村を襲う過疎化の波は、四百人以上いたこの小学校の生徒数を七人まで減らさせ、この舞を伝えていくことを極めて難しくしている。

今年二月末、鵜川に綾子舞の発表会を観に行った。一年ぶりの子供達との再会であった。その日の山村は、例年になく少雪とはいえず、なお一財を越す雪の中に埋もれていたが、下から溶け始めた雪が蒸気となって集落一

(日銀仙台支店長)



カット・工藤倫弘

世の中、時々思いもよらぬおもしろい事にぶつかると。思い出すままに私の経験(目撃?)した事例を並べてみよう。

①東京の私鉄での夏の出来事。妙齢の女性が吊り革にぶら下がっていたが、手を持ち換えた途端、汗をかいたのであてていたのか白いハンカチが落ちた。それが、たまたま私の隣で寝ていた若い男性の股間辺りにハラリ。気配で起きたその男性、何

を(ワイシャツでもはみ出ている)思ったか、そのハンカチをスボンの中へ押し込んで、再び寝てしまったのだ。

②ゴルフでの珍事件。ショートホールでバンカーに入ったボールを打ったK氏、

横眼に、罰打を払ってバンカーから打ち直し。やっとホールアウトしたK氏に「スコアは？」と聞いたら、答えは何と「8(蜂)」。

③夜の国道を車で走っていたら、突然飛び込んできたネオン電車の混雑ぶりはすさまじい。小田急線で新宿に着いて降りようと思ったら、それまで必死で揺れからわが体を支えていた腕に見知らぬ傘が一本ぶら下がっていた(人の腕を何だと思っ

ているのか...)。更には電車の降り口を開けてもらってやっと降りたおぼろげなところから、ところが「事実が身がなる」とは思ってもいなかった。急に降ってきたような別世界への転進の話にただ驚いているところである。

### 随想

#### 事実ほ小説より...

平山征夫

「事実ほ小説より...」の対象にまさかわが身がなることは思ってもいなかった。急に降ってきたような別世界への転進の話にただ驚いているところである。

(前日銀仙台支店長)

バンカーの外にも中にもボールがみえないと騒いだ挙句、バンカーの類に突きささったと思ひ、手でその中を触った途端、蜂の巣があったから堪らない。上を下への大騒ぎ。まだ巢の周りであんなに騒いでいるのを

にびっくり。何の広告かと良く見たら、「パチンコ」の「パ」が消えていたのだ。『チ』まで消えていたらどうなるのだらう...少々品のない話で失礼。

まだ、また沢山ある。東京の... 事実だから余計おもしろい。「事実ほ小説より奇なり」とはよく言ったものだ。世の中に、こつしたおもしろい事が時々あ

るから人生はやめられない...と出来る限りもの事を楽観的に考えるようにしている。しかし、これが逆に悲劇の場合には事実であるだけに心が重くなる訳だ...。ところが、ところが「事実ほ小説より...」の対象にまさかわが身がなることは思ってもいなかった。急に降ってきたような別世界への転進の話にただ驚いているところである。